

音からはじまる 「ことば」の 世界 今井むつみ

ときどき、こんな声を聞きます。
赤ちゃんに絵本を読んでもやるといい、
と言われて読んでみたけど、
聞いているんだか、聞いていないんだか……。
赤ちゃんに「ことば」は届いているのでしょうか？
心理学の立場から、人と言語の関係について
研究している、今井むつみさんに
そんな疑問を投げかけてみました。

赤ちゃんに絵本

——十カ月を過ぎたころ、赤ちゃんに絵本を読んでやっても、聞いているように見えないことがあります。ことばがわからない赤ちゃんへの読み聞かせには意味があるのでしょうか？

ありますよ。それもものすごく。赤ちゃんは声をちゃんと聞いています。ただし、絵本を「見て」いるかどうかは子どもによるでしょう。自分がいて、親がいて、さらに親が持つ別の「なにか」に注意を向けること（これを「三項関係的コミュニケーション」と言います）ができるようになるのは、生後一年に近づく頃とされていますが、かなり個人差があるのです。

また、「聞く」といっても、赤ちゃんは、単語の意味を知らないわけですから、我々大人のような感覚でことばを聞いているわけではありません。

——やはり、絵本の内容はわかっていないのですね。

そうかもしれません。でも、本の内容を伝える以上に大きな役割が、赤ちゃんへの読み聞かせにはあるのです。



先ほど、赤ちゃんは単語の意味を知らないと言いましたが、ことばについて「なにもわかっていない」わけではありません。たとえば、生まれたばかりの赤ちゃんは、なんと母語と外国語の違いがわかります。

赤ちゃんは母親の胎内にいる頃から耳が聞こえています。ただし、羊水の中にはないので、音が明瞭に届いているわけではない。水の中に潜っているときのことを想像してみてください。水の外で誰かが話していても単語は聞き取れませんよね。でも、例えば「ダダダ、ダダー、ダダダ」といったリズムは水中でもよく伝わる。

各言語には固有のリズムとイントネーションがあります。そうした「音の性質」を体得することは言語獲得の第一歩です。赤ちゃんは生まれる前からそれらを聞き、母語を学び始めているのです。「おなかの中にいるときから赤ちゃんに話しかけるといい」と書いた育児書がありますが、言語獲得を助ける、という点で科学的にも真実です。

——なぜ「赤ちゃんが母語と外国語の違いを把握していること」がわかるのですか？

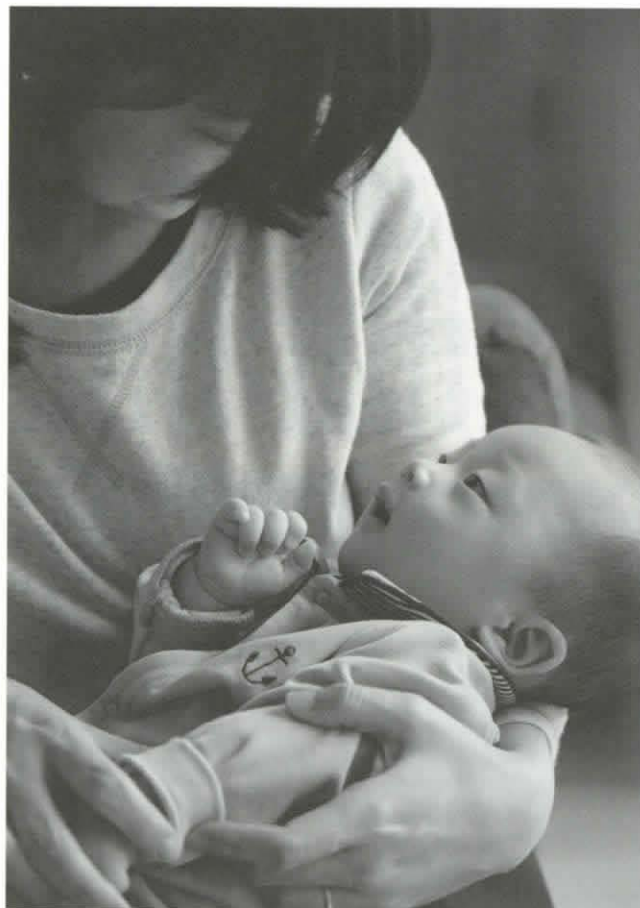
——

もつともな疑問ですね。生まれたての赤ちゃんに「これは英語でしょうか？」と聞けるわけがありません。

そのことは、「おしゃぶり」に関する実験からわかりました。赤ちゃんは自分の聞きたい音が流れてくるとおしゃぶりを強く吸うことがわかっています。生後まもない赤ちゃんに、母語と外国語を聞かせると、おなかの中ですでに慣れ親しんだイントネーションを聞いたときは、もっと聞きたいという気持ちを表現するかのように、おしゃぶりの吸い方が強くなる。一方、外国語の場合は、弱々しくなったのです。

ここ半世紀の間に、赤ちゃんが感じている世界を知るための様々な実験方法が考案されてきました。その結果、赤ちゃんは、周りの世界をただぼんやりと眺めているのではなく、驚くべき学習能力を持ち、自分を取り巻く世界、自分以外の人の意図や気持ちを察していることがわかってきたのです。今回私がお話しするのは、こうした心理学の実験結果に基づいた知見です。

——赤ちゃんは「読み聞かせ」の何を認



識しているのでしょうか。
音です。赤ちゃんは胎内から出てきた後も母語のリズムとイントネーションを引き続き聞き、学んでいます。
私たち大人は言語において、「意味がわかること」が何より大事だと考えますが、意味がわかるためには、まず文章の中の単語それぞれに意味があることを知らなくてははいけない。しかし、生まれた

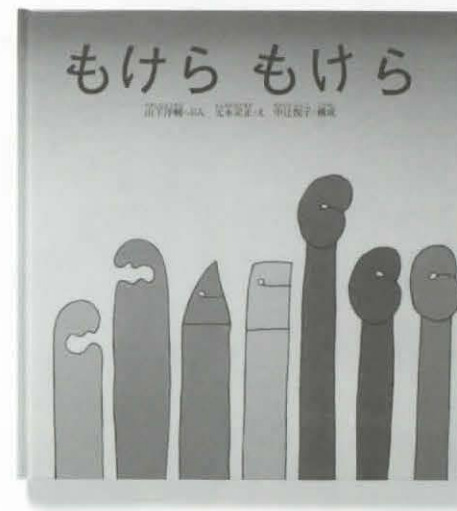
ばかりの赤ちゃんは、音声で聞いた文章を単語に区切ることさえできません。
たとえば「アラミルクホシイノネ」といったことばを赤ちゃんはどのように理解していくのでしょうか。
赤ちゃんは、日常生活の中で聞いた音、あるいは音のかたまりがどのくらいの頻度で出てくるかをちゃんと覚えていきます。母親が「ミルクノム?」「スグミルクツ

クルネ」「タクサンミルクノンデネ」などと頻繁に口にする、赤ちゃんはイントネーションや、単語と単語の「間」を聞いて、「み・る・く」という三つの音のつながりが高い頻度で現れるな、と察するようになります。そして、この音のかたまりがひとつの単語なんだ、と少しずつ認識していく。このように、徐々に学んでいくのです。

なお、幼い子どもが「チガガデタ」と「血」のことを「チガ」と言うことがあります。これは一音の単語を文章の中から察するのが難しいからです。だから助詞の「が」も一緒に抜き取って二語のことばと勘違いしてしまうのですね。

赤ちゃんは日々、大人のことは聞いて、言語を獲得していくわけですが、今は日中は母ひとり、子ひとり、といった家庭が多いですね。まだ会話のできない赤ちゃんに一方的に話し続けるのは難しい。そうしたとき、絵本を読んでもあげることにはとても意味があります。

さらに絵本のことばは作家や詩人によって小さな子どものために、選びぬかれたものです。この上質のことばを子どもに繰り返し聞かせることは子どものことばへの感性を育てることにつながると



今回紹介する絵本

- 1.『ぶーぶーぶー』 小風さち文、脇阪克二絵
 - 2.『もこもこもこ』 谷川俊太郎文、元永定正絵、文研出版刊
 - 3.『もけらもけら』 山下洋輔文、元永定正絵、中辻悦子構成
 - 4.『おおきい ちいさい』 元永定正作
- 表記がないものはすべて福音館書店刊

思います。

また、子どもはごく自然に、お母さんが見ているのと同じ対象に注意を向けます。これを共同注意と言いますが、これはコミュニケーションの始まりであり、言語の習得を促進させる原動力にもなります。

赤ちゃんは、どんなに質が高いとされる知育教材であっても、肉声ではないDVDやメディアからの一方的な語りかけでは、言語をうまく学ぶことができません。これは大人も一緒です。英語を学ぶとき、どんなにリスニングのCDを聞いても、なかなか上達しなかった、そんな経験はありませんか。一方、ネイティブスピーカーと直接話すと、自然にことばが体に入ってくる。赤ちゃんがことばを覚えるためには、生のコミュニケーションが必要なのです。どうか直接触れ合う肉声でのコミュニケーションを大切にしてください。

オノマトペを使つてはいけない？

——赤ちゃん向けの絵本には「ぶーぶー」など、オノマトペ（擬音語、擬態

語）を用いたものが多いですよね。一方で子どもにオノマトペを使うと言語発達によくない、という話を聞いたことがあるのですが……。

オノマトペとは「わんわん」とか「ぐちゃぐちゃ」といった擬音語、擬態語のことですね。動物の鳴き声や物事の状態を表すときに使います。

たしかに、オノマトペの使用を禁じる育児書があります。たとえば幼い子どもに、「ものを投げる」ことを「ポーンする」などと言う。一つの同じ動作に二つの言葉を用いるのは混乱のもと、言語発達にとってよろしくないというわけです。

また、オノマトペを「子どもっぽい」表現と考えて敬遠する人もいますね。赤ちゃんに普段より高い声で「わんわんがいるよ」などと話しかける親の姿を「みっともない」と感じる人もいます。身近に子どもがいない人からすれば、違和感を覚えるのでしょうか。

まず、言語発達のさまたげになる、というのは事実ではありません。むしろ、オノマトペには赤ちゃんの言語獲得を助ける大事な役割があります。これは後ほど述べます。

赤ちゃんに対するとき、話し方が変わ

るのも、人間として実に自然な、本能的な行為です。人間は話しかける対象に応じてイントネーションや声の抑揚を無意識のうちに変えることが、心理学の実験からわかっています。ペットの猫や犬に対して話しかけるときのようです。そのほうが「相手に伝わりやすいだろう」と無意識に感じているからです。

人は赤ちゃんに話しかけるとときには、自然と声が高くなり、語調もゆっくりになります。また、「ミルク、ノム？」と言ったように、単語と単語の間に「間」を置くこともあります。こうすると、赤ちゃんは文の中から単語を区別しやすくなるわけです。

——オノマトペへの大人の誤解についてはわかりましたが、赤ちゃんにはどのようになに役に立っているのでしょうか。

赤ちゃんは大人が話すことばのかたまりの中からまず名詞を見つけ、自分の中に蓄えていきます。名詞とは「いぬ」とか「くるま」など具体的な対象を指すことばですね。

赤ちゃんは聞くことができて、その単語を認識していても、それを発語する力がまだ育っていない。そうした時期に、

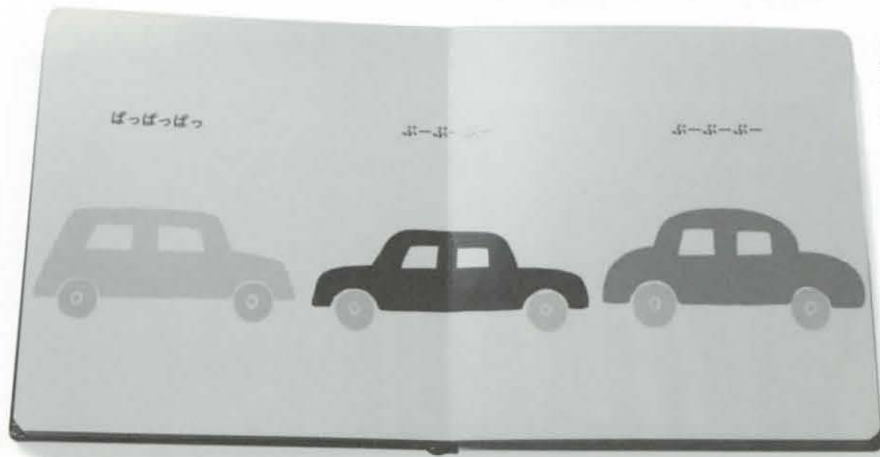
より発音がしやすい「わんわん」とか「ぶーぶー」といったことば、オノマトペを名詞の代用として用いるのです。

オノマトペは「意味」と「音」の関連性が高く、それも赤ちゃんの理解を助けます。「くるま」という音のつらなりより、「ぶーぶー」という音のつらなりのほうが、むしろ「車」という物体を想起しやすいと思いませんか。

また、赤ちゃんはこうした「意味」と「音」の関連に非常に敏感であることもわかっています。仮に「きび」と「もま」ということばがあるとしみましょう。どちらが丸みを帯びた形のものか名前としてしつくりくるでしょうか。どちらが、とげとげのものの名前としてびつたりするでしょうか。十一カ月児であっても大人と同じように、丸いほうが「もま」、とげとげのほうが「きび」だと感じていることが実験からわかっています。

名詞に比べて、文の中から聞き分け、使いこなすのが難しいのが、「投げる」「飲む」などの動詞です。その代用として「ポーン」「ぐくぐく」といったオノマトペがおおいに役立ちます。これに「する」をつけて「ポーンする」「ぐくぐくする」などと動詞化して用いるこ

「ぶーぶーぶー」
赤、青、黄色の車が
音を鳴らしながら
走っていきます。



とができる。

こうしたオノマトペの動詞化は日本に限らず、外国でも行われています。たとえばロシアでは「もしもし」という意味の言葉「アロー」を変化させて「アリオーカエト（もしもしする）」という言葉で「電話をする」という行為を表現します。

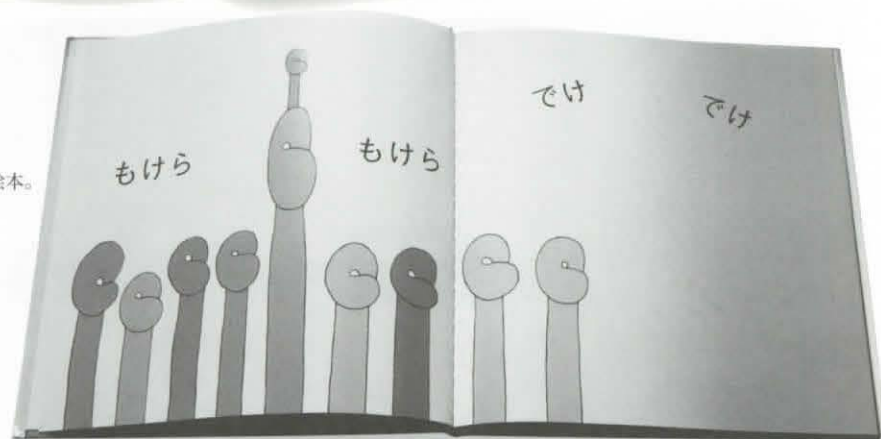
——でも、いつまでも「ミルク、ぐくぐくして」といったような言葉で話しかけ続けているものでしょうか。どこかのタイミングで「飲む」ということばを教えたほうがいいのでは。

そうしたことも自然にできるようになると思います。先ほど言いましたが、人間は相手に合わせて話す生き物なのです。子どもは二歳ぐらいになれば、名詞の他に、動詞や形容詞も理解するようになり、話すことばが「文」になってくる。それにつれてオノマトペの使用も徐々に少なくなっていくます。そうした子に、あえてオノマトペを使つて話そうとは思わないです。ですから、あまり頭で考えないで、自分の本能に従ったことばがけをするのがいいのではないのでしょうか。

『もこもこもこ』
抽象的な絵と感覚的なことばの
絶妙な組み合わせ。このページで
「ふんわ ふんわ」と物体がたがいます。



『もけらもけら』
ジャズ・ピアニストの
山下洋輔によって
生みだされた
ことばが奏でる「音」の絵本。



余談ですが、大人が通常使っていることばでも、語源をたどっていくとオノマトペにたどりつくものが結構あります。たとえば、「ゆっくり」や「びっくり」がそうです。また感覚を伝えたいような種類のことば、たとえば「いらいら」といったオノマトペを完全に排除して日常会話をするのは難しいのではないのでしょうか。実はオノマトペは大人のコミュニケーションにおいても大事なのです。

ところで、絵本には「もけらもけら」などまったく意味のない、オノマトペが出てくる作品もありますよね。赤ちゃんはどう受け取っているのでしょうか？

絵本『もこもこもこ』のことばは二歳くらいになると、すっかり、暗記してしまうそうですね。

子どもは音と場面をリンクさせる能力が非常に高い。この絵本のたとえば、「ふんわふんわ」といった場面、子どもにとっては、まさにこの音で表されるべき世界なのかもしれません。

『もこもこもこ』はまだ通常、私たちが使うオノマトペに似たことばが使われていますが、たしかに『もけらもけら』

など、作者による創作のオノマトペが出てくる絵本もありますね。それでも子どもは喜ぶ。それは各場面が、子どもにとってたまにその音でしか表現できない状況になっているからなのでしょう。そんな、その絵本の中でしか通用しない音を覚えても、日常生活には役立たないんじゃないか、と思われるかもしれません。しかし、ことばの役割は意味を伝えることだけではないですよね。歌や詩など、感性に響くことばの用い方もある。ことばにはいろんな種類があることを体験するという点で意味があることなのではないでしょうか。

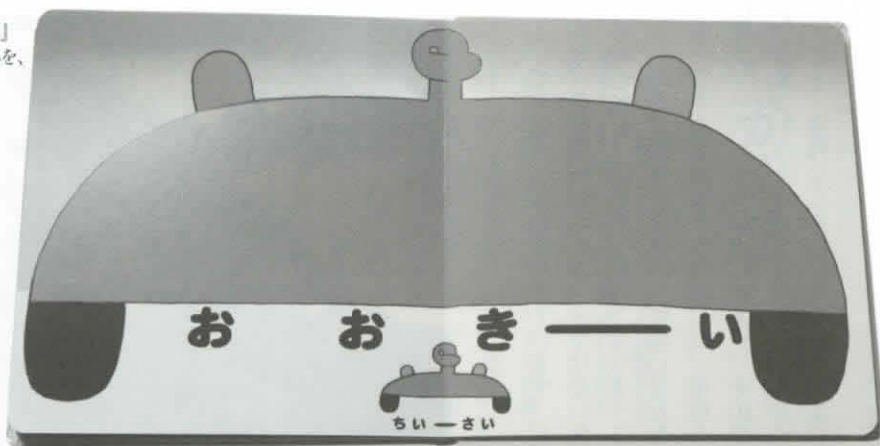
ことばを教えるとは？

絵本を読めば、子どもにことばを教えることができるのです。

いえ、そう考えてほしくはありません。まず大前提として、〇歳の赤ちゃんに大人がことばを「教える」ことはできないということを知っておいてください。

たとえば、カエルの写真を見せて、「これはカエルだよ」と言っても、「その写真」が「か・え・る」だということは理解できたとする。でも、本物のカエルを

『おおきい ちいさい』
いろいろな形の大小を、
抽象画で見せる
赤ちゃん絵本。



見たときに、それがカエルだとわかるかどうか。赤ちゃんは「その写真」がカエルだと知っても、まだ本物と結びつけることはできません。また、別の種類のカエルや、ジャンプしているカエルも同じく「カエル」と呼ばれることをどうやって伝えたいのか。こうしたことをすべて教えることは不可能ですね。赤ちゃんが自分でいろいろなことばを聞き、いろいろな実体験を経て、自分の力で会得していくしかないのです。

幼い子どもは言い間違いをよくしますね。それは彼らがことばを獲得しようとしている最中であることの証拠です。温かく見守ってあげましょう。

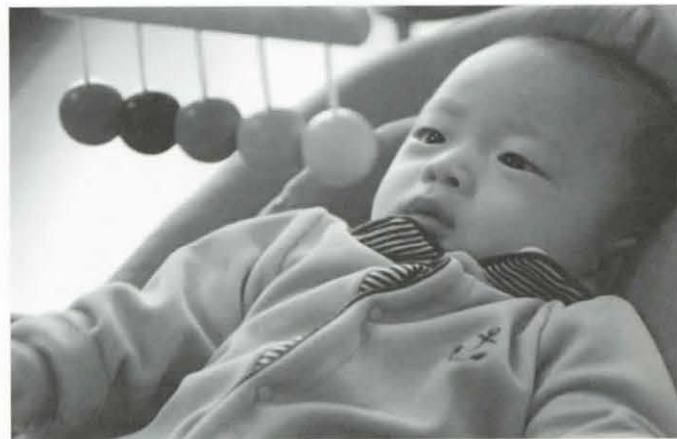
そんなとき、彼らが苦手とすることばがあることを知っておくことは有用かもしれませんね。

基本的に「比較」をあらわす言葉は苦手です。たとえば「大きい」「小さい」ということばの使い方は四、五歳になってもなかなか正確に使えない子どもが多いです。たとえば大きいネズミと、小さいネズミが並んでいれば、その状況で、どちらが大きいかわかる。でも、ネズミというのは、他の動物に比べたら、たいい小さいですね。

「大きい」「小さい」というのは何と比べるかで変わります。そのことを理解して、使いこなせようになるには、いろいろな実体験が必要なのです。

また、場所をあらわすことば「前」「後」も状況によって変わります。たとえば奥から手前に「A」「B」「C」と書かれたハコが並んでいたとき、BはAの「前」だけど、Cの「前」ではない。時間をあらわすことば「昨日」「明日」も苦手ですね。一日経つと今日は昨日になって、明日は今日になる。そこが子どもには理解しづらいのです。

色の名前も苦手な子が多いですね。子どもは、絵を描くのが好きでしょう。二、三歳の子どもに「この絵は何？」と聞けば、猫とか犬とか、喜んで話してくれませんが、「この絵、何色？」と聞くと、答えられず機嫌が悪くなる子があります。「赤」と「緑」の紙が並んでいれば、色と同じではない、ということばかりです。でも「赤」を指さして色の名を聞くと、答えられなかったり、別の色の名前を言う子もいます。幼い子どもは、赤や緑といった単語を、「色を表すことば」



としておおざっぱにとらえています。だから、色を聞かれたとき、赤ではない色に対しても、「あか」と言ってしまうことがある。色を示す単語が実際にどんな色をさすかを理解するためには、生活の中で、いろいろな状況に出あい、その中で学んでいくしかありません。大人からすると、意外なくらいに時間がかかるの

です。

子どもがことばを間違えたとき、「それは違うー」などと厳しく接すると、子どもは、発語することがおっくうになってしまふ。幼い時期により大事なことは、ことばが好きなことなのです。好きだからこそ、もつと知りたいと思うのですから。それを損なわないためにも、絵本を「言語を教える手段」と考えないことが大事です。

親が子どもに教えてやろうという意図を持ち、まるで「授業」のように、絵本を読んでいたら、赤ちゃんは楽しめないと思うのです。それよりは子どもが自然に「もつと読んで」と思ってくれる楽しい雰囲気を作ることが大事です。

子どもがうれしそうにしていたら、お母さんも、もつと絵本を読みたくなると思います。これはコミュニケーションの基本でもあります。相手がうれしいと自分もうれしい。それがいちばん大事なことです。

いまいむつみ 慶應義塾大学環境情報学部教授「専門は認知科学、言語心理学、発達心理学。著書に『ことばと思考』（岩波新書）、『ことばの発達の謎を解く』（ちくまブリーク新書）などがある。

外国語はいつから？

外国語教育は赤ちゃんの耳が柔軟なうちから始めたほうがいいとも言われますが、本当でしょうか。

たしかに赤ちゃんの耳は柔軟です。日本人は英語の「L」と「R」の発音を区別することが苦手というのは有名な話ですが、生後十カ月よりも前の赤ちゃんは聞きわけることができる、という実験結果があります。

しかし、その頃から外国語教育をすべきかは、家庭環境によります。父母の母国語がそれぞれ違う場合は、今後、親や祖父母とのコミュニケーションのために二カ国語が「必要」ですから、幼いうちから複数の言語を聞いてもよいでしょう。

ただし必要がないのに、二カ国語を無理に教えることには反対です。なぜなら役に立たないからです。

親は、我が子がべらべらと英語を話せるというだろうな、将来それが役に立つはず、と思いがちです。

ところが、「言語」を活かして仕事をする際に重要視されるのは「話す」力よりも、「読み書き」の力です。政治家であれ、科学者であれ、国際舞台でスピーチする際、発音のきれいさが問題にされることは実はありません。相手が聞き取れないと困りますが、わかりさえすれば、流ちょうである必要はない。むしろ大切なのは内容です。

そして、中身のある文章、それも、ちゃんと相手に伝わる文章を「書く」ことは母語でも難しい。母語できちんとした文章を書けない人が、外国語で書けるなんてあり得ないことです。バイリンガル環境で育った子どもでも、フランス語とスペイン語のような似た

系統の二カ国語ならともかく日本語と英語のような、まったく違う言語を同じレベルで「書く」ことはかなり難易度が高い。どちらか一方の得意な言語に偏ることが多いようです。

ですから、外国語を教える前に、まずは母語の習得を大事にするほうがいいと思います。特に幼い子の場合、外国語を教えるために教材の映像を見せたり、塾に通わせるのは、害にはならなくても、時間をもったいないと思います。幼い時期に伸ばすべき力がもつと他にあるからです。

それに外国語を「話す」力をどうしても身につけたいと思ったら、大人になつてからでも遅くないのですよ。覚悟を決めて、半年ほどその言語が話されている土地で暮らせれば、だいたいの人は日常会話はできるようになります。